

小田実

ベトナムから
遠く離れて

3

小田実

へトナムから
遠く離れて

3

講談社

ベトナムから遠く離れて 3

一九九一年九月二十六日 第一刷発行

著者——小田 実

© Makoto Oda 1991, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一一二〇一

電話 出版部〇三三三九五―三五〇四

販売部〇三三三九五―三六二二

製作部〇三三三九五―三六一五

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——四七〇〇円（本体四五六三円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替いたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛に願います。

目次

第十六章·····	五
-----------	---

第十七章·····	二四〇
-----------	-----

第十八章·····	四五—
-----------	-----

第十九章·····	六七五
-----------	-----

装丁
田村義也

ベトナムから遠く離れて

3

第十六章

一

律子をはじめ国夫から先日電話がかかって来て出るように頼まれていた、誰がどう考えてつけたのかおそく国夫が自分で考えたものだろう、「芝山国夫を励まし、彼の前途を祝する会」という長たらしい名のパーティに出る気はもちろんまるつきりなかったのだ。「解散」の噂がさかなこの一、二箇月、選挙の資金稼ぎと支持者集めを目的としたその種のパーティはあちこちで開かれていてべつに珍しくもなかったが、「うちの部長、気が狂うたのかそれとも一杯飲まされよったんか、あの若僧にえらいご執心で取材に行けとおっしゃるもんやから」としかめ面をしながら取材に出かけようとしていた政治部の記者の話では、彼の場合、このパーティの成功で「鼻持ちならぬ外務官僚の若僧」が「洋品屋のぐうたら馬鹿息子」を蹴落として「今や脳軟化症の徴候がどうにも隠せんとこまで来た」老代議士の地盤を引き継ぐことが本ぎまりになる。「そうじゃから、とにかく人は集めんといかんのじゃな。えらいさんにも来

てもらわないかんで、若僧今や必死になつとるみたい。しかし、はたして結果は蛇が出るかトカゲが出るか、とくと見に行くとするかね」と投げやりな口調で茶化すように言ってから、「ま、これがわが国の民主主義の現状じゃね。鼻持ちならぬ外務官僚の若僧があかんことになつても、洋品屋のぐうたら馬鹿息子が代議士になる。どっちにしろんでも、話は変らぬ」と「戦後民主主義」を世の不人気にもかかわらずひとり断乎死守しておかげで今や「生ける戦後の化石」になつてしまつたと自称する律子より十歳以上も年長の野村は急に生真面目な口調になつてつづけた。彼は彼が口癖のように言うようにその「生ける戦後の化石」の信念のゆえにか、それとも彼がただたいして有能でないからかいまだに平記者をつづけている社では有名な存在だったが、さすがに長年平記者であちこち取材に走っているせいもあつてか港都の政界の情報をことこまかなところまでおさえていて、その種の「情報の鬼」を自任してもいた。「今日の若僧のパーティには、東京から何人かえらいさんが来ることになつておじやるが、だいたいみなさん、ご自分の選挙区に顔を出すついでにお寄りになる。ただな、お律さん……」と社の玄関で出会つてそのまま彼女と立ち話をしていた野村はこれまで口にしたことのないそんな親しげな呼び方をした。「副幹事長の坂下昇が来る。これは他の陣営代議士ならぬ陣営大臣諸氏とちがって、わしの見る

ところ未來は宰相となる男。こいつ、コリアア筋にぐつとにらみがきく男じゃから、今日のパーティの主の若僧は將來けつこう使えると踏んだんちがうか。坂下昇は、べつに選挙区に顔出すついでに來るんじゃないんやで。ただこの若僧の前途を祝福するためにだけ來る。もっともお礼もしこたま召し上げての話じゃけどな。まあ、これで当県の政界の大移動……」野村はため息をつくように大きい息をした。「一段落というわけじゃろな。今にも死ぬ死ぬと言われながらどういふ奇蹟がそこにあつたんじゃないか、まだ生きながらえているものと文部大臣殿のあと釜は洋品屋のぐうたら馬鹿息子の母親……ということとはつまり洋品屋の女経営者そのものということじゃが、彼女のものとのボーイ・フレンドの土建屋ということに決まれば、脳軟化症の地盤の後継者は東大出の秀才外務官僚。……まったくしょうがないと思うけど、まあ、これでも、お律さん、息子を強引に自分の後継者にするとこやらの社会主義国よりまだしもましということちがいますか。」皮肉げにつづける彼をさえぎるようにして律子が「わたしに判らないことがあるんだけど、土建屋さんはどうしてあなたのおっしゃる脳軟化症の地盤よりもと文部大臣の地盤にそんなに執着するのかしら。どうせあなたのおっしゃる洋品屋のグウタラ息子さんを放逐するなら、はじめからそっちと後継者争いをおやりになればよい。やっぱ、昔のガール・フレンド

の息子さんを相手に争うのがいやだったのかしら」といつか考えたことのある、しかし、そのあとすっかり忘れたままになっていた疑問を口にすると、県政界の「情報の鬼」でもある時代おくれの「戦後民主主義」の信奉者は、時代おくれをそのまま漫画に描き出したような太縁の眼鏡のレズごしに彼女の無知を憐れむようにじつと見た。「お律さん、そんなことがおいやなような人物は代議士になどなろうとしませんがな。お律さん、あなたの質問に対する答は二つ。ひとつはフトコロの中身の乏しい若僧の官僚にナミダ金をやって自分のところから追いやって、洋品屋のグウタラ馬鹿息子とたたかわせるほうが、自分がそいつと後継者争いでケンカするよりはるかに安上りにつく。秀才官僚がグウタラ馬鹿息子に軍資金の不足で負けたところで、土建屋さんの知ったことじゃない。それからもうひとつの理由は、もと文部大臣の死にかけ居士の地盤には、土建屋さんに利権のことでひと肌、ふた肌、いや、もう肌脱いで貰いたがっているお人が何人もいる。」「……で。若き秀才外務官僚ははいよくナミダ金で土建屋さんの狙う地盤から放逐されたわけ。」律子は何度か会ったことのあるさつきの兄のぶあつい皮膚が頭のよさも鋭さも野心も一切をなかに押し込んで包み隠したような、「いかにも東大出でございという顔よりこういうそこのオッサンの顔しているほうが票が集まるんやで」と彼自身が口癖にしているとい

うことば通りの四角ばった大きな顔を思い浮かべながら野村のことばをそのまま引き継ぐように言ってから、「しかし、ナミダ金と言つても相当な金額の金なんだろうな」とことさらにものを知らぬ無邪気な女性の口調でつづけた。

「そりゃ、もちろん、わしらにとってはたいへんな金額。

しかし、お律さん……」野村は調子に乗ったようにさっきからの皮肉な口調をつづけた。「代議士になるのには、いや、そのまえに誰かの地盤を引き継いで誰かの子分になって党公認候補の名譽と実権を得るにはわれらの貧しい想像力、哲学では測り知れぬほどの金がかかるもの。そこであなたもご存知のミスター朴に、ぜひとも舞台上に登場してもらわんといかんのじゃが、あいにくあのご仁、このあいだ彼の本国に帰ったところで留置場にぶち込まれて身ぐるみはがされてしまった……という説もあるが、わたしは信じんね。今の独裁者もいろんなところに味方を残しとかんとそれこそ打倒されて殺されるからね。しかし、とにかく今のところミスター朴は貧乏になつた。これはたしかな事実じゃね。一説によると彼の息子のほうが今やサー・バイバル・ゲームかコンバット・ゲームか何かく知らんが戦争ごつこの事業であつて込んで金持になつていて、彼は息子から利子をつけて金を借りているということじゃが、世の中きびしいね。もっともこのきびしい話は、わたしは確認してませんがね。ただ、日本とコリアの腐れ縁、これが存

在しつづける以上、あの朴さんが舞台から脱落しても、幾十、幾百の別のミスター朴、ミスター金、ミスター李が出現して来るのは、これはマルクス主義の言うておじやる、しかし、もう今はだいいぶあやしげなもんになつた歴史の必然以上の歴史の必然。日本、コリアの友好、別名持ちつ持たれつ腐れ縁が存在しつづける限り、芝山国夫代議士の前途は安泰、まさに祝福されつづけるものとしてありますな。あの若僧、この関係がつづく限り外務大臣ぐらいはかたいんじゃないかね、あいつはハーバードに行つてたかという話で英語は上手やし、アメリカ筋にも縁がありそうじやし、コリア、アメリカ双方に顔がきき得るとあつては、副幹事長がかなり代價を得ることはもちろんとあつてとにかくわざわざ中央から彼の前途を祝福するためにだけパーティにやつて来ることは、これもまた歴史的必然。」それだけひと息に調子に乗つたようにつづけてから、「ところで、お律さん、ものは試し、いっしょにこれから彼の前途を祝福しに行つてみないかね」と彼は律子にむきなおつていた。「あんたの話では、若僧から来てくれと電話をかけて来たんじゃない。取材してくれということじゃろうが、それなら二人で行つてやつたほうが先方はよろこぶ。食い物も並みのパーティより上だと聞いている。ホテルでたしかめて来たんじゃないから、これは確か。こちらはン万円払うわけじゃないから、食い逃げということもある、つま

り、パーティーでさかんに食って、何も書かんという術もある。いや、うちの部長が何を言おうと、おれは書かんね。書くつもりはないね。」彼は突然決意したように言った。気の弱い男がことばの勢いにまかせて自分でも思ってもみなかったことを突然決心したりする。そんな感じが彼の口調に出ていた。

「じゃあ、わたしが書こうかしら。」律子は笑いながら言った。彼の突然の決心を軽く皮肉ったつもりのもったくの冗談だったが、言い終ってから実際これは書くべきことではないかと不意に愕然としたような感覚とともに思った。昔「OPEC」（石油輸出国機構）が設立されたとき、日

本の全国紙は経済専門の一紙を除いて報道しなかったと誰かが指摘していた。設立のニュースを載せたその一紙も、小さなベタ記事でお座なりに報道しただけのことだったからたいして賞められたものではなかった。国夫の前途が野村の言うようにそれだけ洋々としているものであるとするなら、このパーティーはたしかに報道される価値があるだろう。もちろんそれは悪夢の歴史の始まりとしての価値だ。そう考えると律子はあらためて苦い現実眼をさまたされたような気持になったが、ただ律子がつづけて「じゃあ、わたしもいっしょに行くかな」と野村の時代おくれの太縁の眼鏡を見ながら言ったのは彼女のその思いのためではなかった。それは彼がふと思いついたようにさつきの名前を口

にしたからだった。「あいつには妹がひとりいるじやろ。英語のえらくうまい妹がな。パーティーには外人はんもたくさん来るけど、その英語のうまい妹を通訳に雇ってありますからご心配なくとあいつは部長に言ってきたそうじやで。ほんまにいや味なやつやで、あいつは……」その野村の子供っぽい憤慨のことばの半ばで律子はさつきに会いたくなっていた。このところしばらく会っていないのだが、彼女はもうしているのだろうと案じる気持がそのまま会いたい気持になっていた。「じゃあ、わたしもいっしょに行くか」と自然にことばが口を衝いて出た。

二人が会場のホテルの玄関に入ったところで奥の大広間からの拍手をまじえたどよめきがひびいて来た。それだけそれはそこに人が集まって来ていることを、そしてもちろんそれだけ「芝山国夫を励まし、彼の前途を祝する会」が成功であり、彼が悪夢の歴史の第一歩を確実にものにしたことを示していた。二人はどちらからともなく、顔を見合わせたが、「これであいつ、脳軟化症の地盤が貰えんようなことになったら、もうひとつ切り札を使いよる」と野村はしかめ面をしながら意味ありげに言ったあと何もことばをつづけなかったし、律子も訊ねなかった。

たしかに大広間は人出で充満していた。二人はまた大広間の入口に立ちすくんだように立って顔を見合わせたが、

入口に立つただけでムツと来る人いきれとアルコールと煙草の匂いと喧騒のなかからとぎれとぎれに聞こえて来るマイクの声がこれから「芝山国夫を励まし、彼の前途を祝する会」が始まることを告げていたが、拍手とともに笑い声がどよめきとなって会場にひびきわたったのは、かなりかん高くてキンキン金属性の音をひびかせて来るマイクの声が「今日は大安吉日、お日柄もよくて、新郎新婦も……」ともちろんまちがえたのではなくて故意にそう言つてのけたのだろうがひとときわかん高く言つたからだつた。「あれ、テレビによく出てる司会者の……」野村の顔は名前を思い出そうとして努力しているように見えたが、律子は律子で同じ努力をしていた。「ほら、軽薄才子を売り物にしている、もとはコメディアンか落語家だつた……」彼はそうこ**と**ばをつづけたが、それもまた彼女が思つていたことだつた。「とにかくああいふ無責任でスイスイ生きて行くのが今日**きょう**人気がある。新聞記者も、わしらみたいないかにも新聞記者が取材に行くというような勢い込んだのはあかんのやで。……あんたも、思いつめ女史とこのごろ若い連中に言われとるそうやないか。」彼は皮肉な眼で律子を見ながら言つた。

そのことばを言い出したのは彼女の部でいちばん若い記者の佐々木だつた。取材に行こうとしていつものようにノートやら資料やらの入った大きな革のショルダー・バッグ

を肩にかけた上にカメラも肩にかけたところで、横にいた佐々木が、「ほんとに田島さんは劇画のブンヤを地で行っているいう感じですか。田島さんのそのかつこうと言ひ、思いつめた顔と言ひ、大事件の取材にこれから行こうとする大スタイル、ひと昔まえの劇画のブンヤでつせ。当世はそういう思いつめ女史スタイルはやりませんのや。軽薄才子が一世のはやりっ子となる時代、新聞記者もそれで行かんとあかんのとちがいますか。そうやないと時代の空気はつかめない、若者の気持は判らない。第一、田島さん、もうこの世界にはそんなに勢い込んで取材に行くほどの変つた大事件があるんやろか。大事件はあつたところで、あいかわらず、米ソの対立、核の脅威、エコロジー、人類の危機、第三世界の飢え、差別、抑圧……変りばえしませんでした。変つた、シャキツとした事件はどこにもない。……」と皮肉な口調でまくしたてたのだが、「何いい気なこと言っているのよ。このごろのはやりの文句ばかりを口に出して……」と律子がやり返しかけて黙つてしまつたのは、彼のそのいい気なことばの羅列のなかにある真実があるように感じとられたからだつた。そして、その真実はたしかにどこかで彼女の痛いところをついてもいた。

「わしもあんたも時代おくれなんやで。まあ、多かれ少かれ、化石みたいなところがある。わしは今のはやらぬ戦後民主主義の化石。あんたは……」

「生ける戦後の化石」はちょっと考え込むように眼をしばたいたから、ちよいどいいことばを見つけ出したように子供っぽく微笑した。「今はやらぬベトナムの化石。」

律子は彼をおいて黙って歩き出していた。何度も人の背中にぶつかりながら歩きにくいのをこらえて会場のまんなかまで行ったが、そこでボーイが運んで来た飲み物の盆からビールのグラスを取り上げて口にやろうとしたところで思わずそのままの動きを途中でとめてしまったのは、また「軽薄才子」が何か面白いことを言って周囲がふたたびどよめいたからではなかった。ふと眼をあげた先の横に大きく「芝山国夫を励まし、彼の前途を祝する会」と港都の有名な書道家の署名のある文字で書かれた横断幕の上に、あたかも会場全体を見下ろすようにして五メートル四方もあるかと思われるほどの大きな日の丸の旗が壁と天井の両者にまたがって斜めに取りつけられていたからだ。

全身に冷たいものが走ったと言っては誇張になる。しかし、何かひやりとした感じとともに自然に全身がこわばったのはこれまたまぎれもない事実だった。律子は気を落ちつけるようにグラスをもう一度口にあてて半ばほどの量を強いて口に流し込んでいたが、同時に彼女の耳があいかわらずの喧騒のなかで明瞭にとらえていたのは国夫が未来の外務大臣ならそのときにはその上位に立って確実に首相の地位についているにちがいない、多額の御礼金と引き換え

とは言えわざわざこの会のためにだけ港都にやって来たという副幹事長坂下昇の「首相のおっしゃる戦後の総決算は今こそこの栄えある芝山君の前途を祝する会場のように汚れなき日章旗の下に始まるのであります」と切り出した挨拶のことばだった。「この汚れなき白地に赤く朝の太陽の輝きを描き出したわが国の国旗が象徴するのは何んでありますか、今こそわたしたちは、つまらぬ気がね、先入観、偏見を捨ててはつきり言わねばなりません、それはわたしたち国民とともにまさに辛苦、よろこびをとともにされて来た天皇陛下であります。わたしたちは今たしかに世界経済が軒なみにダウンし沈滞しているなかでただひとつ繁栄をつづけておる。しかし、このわたしたちの日本の繁栄は何んによってもたらされたものでありますか。もちろん、平和であります。戦後のこのわたしたちのもの未曾有の繁栄は戦後の平和によってもたらされたものであることは、これは誰しも否定していかないことであります。これはアホウにいまだに非武装中立などというお題目をとなえておる社会党さんもソビエト、中国の手先である共産党の売国奴どももひとえに認めている事実でありますが……」マイクの坂下昇の声はここで大きく拍手を待つかのように咳ばらいをしたが、社会党さんと共産党の売国奴どもに対しての彼の悪口とともにまき起こった笑い声につづいてもちろん拍手は大きく起こっていた。「しかし、そのアホウども、売国

奴どもにまったく判っていないことがひとつある……」声は拍手を途中で押さえ込むようにしてひととき大きくつづいた。「もちろんここにいられる芝山君夫妻をはじめとしてこの会場に芝山君の前途のために来て下さっているみなさん方にはとつくの昔に判っていらつしやることであるが、この平和は何んによって、誰によってもたらされたものでありますのか、すぐる昔、昭和二十年八月、戦争をやめよ、終結させよとなみいる軍部、軍閥のアホウドも、売国奴どもを説得なさって、わが身はどうなってもよい、今こそ日本を救うべきだと御聖断なされた上御一人おいて他にありませんか、この御聖断なくして現在の平和がありましようか、わたしどもの日本の未曾有の繁栄がありましようか。戦後の経済の発展、これをして『奇跡』と称するような人が往々にして外国にあつたりするのだが、『奇跡』というようなものがこの世界にあるはずがない、それはいまだに日本で革命をするのだとか、社会主義国日本をつくるのだのアホな子供、だましの夢をいまだに見つづけている共産党の売国奴ども、社会党のアホウ連中をはじめとする時代おくれの左翼連中のオツムのかなにしか存在しないことであります、とにかくこの繁栄は奇跡というものではない。これははかならぬわたしども国民が自らの額に汗する努力によってかたちづくって来たものであります。……」拍手がまた大きくわき起つていたが、ころあい

を見はからつたようにしばらくしてマイクの声は、「しかし、諸君……」とまたつづいた。「わたしどもの繁栄をつくりだした、奇跡をこの世につくり出したわたしどもの腕にしっかりとそえられた腕のことを忘れてはなりませんまい。それは何んの、誰の腕でありますか、芝山君……」そこで未来の首相はかたわらの未来の外務大臣をふり返つたのだらう、それだけのことは会場の人出のなかでも容易に想像はついたが、しかし、次に聞こえて来た彼の応対よりは彼女の想像をはるかに超えていた。「ハイ、先生！」と坂下昇の声よりたしかにいちだんと若やいだ声がマイクを通じて会場にひびいて来て、そのまるで小学校の新入生が先生に答えるような元気に満ちた声は会場のざわめきを一瞬黙らせるほどの力と新鮮さに満ちていたが、「もちろんそれは先生がさつきから御指摘の通りひとえにおそれ多くも上御一人、聖上陛下の御聖断のたまものであります」と若やいだ声は同じように元氣と明るさに満ちたものでありながらそこは年相応の分別さを感じさせる口調で一氣につづけた。彼のそのことばには、やはり、一瞬の戸惑いが会場全体にあつたにちがいない、たぶん坂下昇が大きく手を打つことで始まったものだらう拍手は少しの間隔をおいてまき起つたが、マイクの若やいだ声は拍手のどよめきをも押さえつけるように元氣よくつづけて聞こえて来た。「この事実をわれら日本国民が自らのくもりもない澄みわたつた眼で

直視するとき、この人類の危機が叫ばれる多事多難のおり、おのずと未来へむかつて道はひらかれるのであります。・日本国の未来とか日本国民の未来とか、わたしはそんな自分たちのことばかり考えているのではない。世界全体の未来が、今や日本国、日本国民の双肩にかかつている。今日の世界をごらんなさい。どこに日本経済のようにみことなバーフォーマンスを示しているところがありますか。もはや、日本は西洋に何も学ぶものはない。彼らがわたしどものこのみことなバーフォーマンスを十分に学びとって欲しいのでありますが、そこにしか彼らの生きる道、未来はないのでありますが、この現在のバーフォーマンス、これは何んによつて可能になったのでありましょうか。ひとえに上御一人の御聖断、それによつてであります。……」拍手がまた激しくわき上つていたが、そしてそれはもう今度のはためらいなく彼のことばにそのままつづけるかたちで起こつていたが、律子は、今、彼の横で彼の妻がどんな表情をして立っているのか、それを見たいと思った。さつき律子は会場に入りぎわに今日のパーティのために新調したもののらしい高価な物であることはひと目見て判つても決してみごとに着こなしているとは言えない絹のカクテル・ドレスに身を包んだ彼女の姿を見かけていたが、彼女の表情は夫のすること、しゃべることをすべて距離をおいて眺めている女性の表情だった。彼がどこへ行こうと、何をしよ

うと、彼女は黙つてつき従つて行くだろうが、それは必ず一定の距離をおいてのことだ。律子は唐突に留學時代アメリカ合州国の小さな都会の博物館で見た石の大きな棺を眼に浮かべていた。そのドイツの田舎の教会にあったものを持つて来たという石の棺の見るだけで重量感のあるぶあつい蓋の上には棺の中身の生前の姿らしい重い甲冑を身に着けた騎士と甲冑同様に重い感じのする服装の彼の夫人の石像が横たわつていたのだが、律子がその二つの石像のさまをいまだに明瞭に記憶しているのは、何んの気なしに眺めているうちに石像が二人の生前の姿かたちをそのまま石に刻み込んでいるような気がして来たからだつた。いや、二人の生前の姿かたちというのではなかつた。二人の生前の關係をそのまま刻み込んで、今日まで、アメリカ合州国という二人が決して思いもしなかつた土地にまで来て、二人が決して思いもしなかつた日本という国の女性に眺められている。――

二つの石像は並んで仰向けに横たわつていたが、石像のあいだには決して縮まることのない距離があつた。それは生前にもあつた距離だが、石像はその距離を永遠の時間のなかに刻み込んでいた。それは縮まることのない距離だったが、同時に拡大することもない、拡大することも許されていない距離だった。二人はおたがい近づきあつて寄りそうこともできないのなら、逆に離れて別れ去ることもで

きない。二人にできることはおたがいがその一定の距離をおいたまま並んで横たわって永遠に儀式を行なっていること以外にはないのだが、顔はそれぞれに天をむいていて、おたがいを見ることもない。――

さつきなら、そんなことはしないだろうと律子は不意に思った。さつきなら、彼女の夫が誰であれ彼と行をとともにすると決めるならそこにどのようなぶあつい壁があろうとそれをぶち破ってまで彼の世界のなかに入って行こうとするだろうし、逆に彼に逆らうなら、彼にむかって全力で打ちかかるなり、あるいは逆に別離の辛さに泣き叫びながらも彼のもとから立ち去る。律子はその泣き叫びながら立ち去って行く彼女の後姿を見たように思った。その名状しがたい激しさに満ちた後姿にむかって彼女は（あなたにはわたしのようなどころがある）としゃべりかけていたが、後姿はふり返らずに（あなたにもわたしのようなどころがある）と言いつ返してから、（しかし、それでどうだと言うの）と冷たく突き放すように言い放った。

律子はさつきの姿を探し求めたが、女性にしては長身の彼女の姿は、後姿であれ何んであれ、どこにも見えなかった。

そのあいだに国夫の話は終っていた。さつきから彼の話に拍手はつづいていたが、このままい気になってしゃべりつづけていては先輩の未来の首相のお株を奪うことにな

りかねないと未来の外務大臣はとつさに計算したのでらう、「先生！」とまたよく透る彼の若やいだ声がマイクを通して会場にひびき渡った。「先生の先刻の御質問に対するわたしの答はこんなところでございますが、先生の御採点はいかがでございましょうか。」笑声が満場の拍手とともにまき起こっていた。「百点」と笑声と拍手のどよめきのなかで誰かが叫び、すぐそれは「百十点」とか「百二十点」とかのべつの部類の声にひき継がれて行ったが、ころあいを見はからったように「九十八点」と坂下昇の低い声が、しかし十分に鍛えぬかれた感じのする声が野次の声を一気に押さえ込んで会場全体にひびいた。その坂下昇の採点は会場の誰にとつても意外だったらしくて一瞬会場は静まり返ったが、もちろん会場の反応は声の主が予想したことであったにちがいない、鍛えぬかれた声は落ちついた口調で「本来なら、わたしもろ手をあげて、会場のみなさんの百点、百十点、百二十点の声に賛成したいのであります……」とゆっくりつづけていた。「しかし、本日、わたしは、あえてわたしの採点を九十八点にとめておきたい。それは、お判りでしょうが、彼には満点にはあとまだ二点ほど足りないものがあるからであります。彼はなるほど東大を優秀な成績で御卒業なさった、難関をもって鳴る外交官試験にも一発で合格して外務省から派遣されてハーバード大学にも留学なされた、いや、そういうクチパシの

黄色い時代のことはどうしてもよろしい。問題は現在であります。現在は今や、外務省の若手として内外に存分に活躍なさっている。このまま放っておいても次官とか局長とかの地位は確実だと評判だが、今あえて彼はその官僚としての安泰の道を捨てて政治家としての嵐の人生を選びとうろとしていられる。これはひとえに芝山国夫君の日本の未来を案じての憂国の情のなすところだとわたしどもは見ておるのですが、この彼にして二点足りないものがある。そうあえて申し上げておきたいのですが、その二点とは何か。それは、彼がまだ衆議院という栄えある政治家の舞台に議席を得て登場されていないことであります。その栄えあるヒノキ舞台で、彼の俊敏なる頭脳と元氣にあふれた若さのエネルギーが、思う存分、日本の前途のためにも、彼自身の前途のためにも発揮されていないことであります。まず、彼がこの会の成功とともに栄えある党公認として立候補されるに至ることが一点、ついで、栄えある当選を獲得することが次の一点、計二点がいまのところまだ満点に至るのに不足しているのであります。会場のみなさん、この二点を得て彼が国政のヒノキ舞台に登場されて来るとき、わたしどもの党のカナメにおける人間は彼に百十点、百二十点とかそんなケチくさいことは言わない、ただちに二百点、三百点をさし上げて、外務委員会のスター議員として活躍されることを期待しておると申し上げておきたい。

……」拍手がまたどよめきをつくったが、そのどよめきのなかでマイクの鍛えぬかれた声は「しかし、会場のみなさん、二百点、三百点はまださきのまたさきのこと、わたしどもは現在を見なければならぬ。……」と無知なる大衆のどよめきを叱りつけるような激しい口調でとどめを刺すように言った。「現在の問題は満点に足らないところの芝山国夫君のこの二点、これをどう獲得するかにかかっておる。みなさん、ポヤポヤしているときじゃない。この二点、彼がどう東大、ハーバード出の頭のええところを見せようが、ケツをまくって見せようが、彼ひとりだけの力で得られるもんじゃない。実際、男のストリップなど見られたもんじゃないが、この二点、ここに来ていられるみなみなさまの厚い御協力、御支援あつてはじめて得られるものであります。みなさん、世界はさっきも国夫君がおっしゃっていたが、まさに多事多難、天皇陛下が下したもうた御聖断にもひとしき決断が求められている時代であるが、このときにあたつて芝山国夫君を国会に送り込み、国政の場に立たしめようとすることは、御聖断の道にわたしどもの日本を正しく起たせることになる。諸君、今はまさしく決断のときである。御聖断の道に日本を正しく起たせるか否か、その決断のときである。……」笑声と拍手が交互に起こっていたが、そのうち拍手が彼の声と口調の両者が激しに行くにつれて笑声を圧倒して行った。拍手のたかまりの